



現代の文学 = 33

五味川純平集



人間の條件
— 全 —

河出書房新社

現代の文学 33 五味川純平集



© 1963

責任編集

川端康成 丹羽文雄

円地文子 井上靖

松本清張 三島由紀夫

(本書は株式会社三一書房の好意により刊行)

昭和38年6月15日 初版印刷

昭和38年6月20日 初版発行

定価 680円

著者 五味川純平

発行者 河出孝雄

印刷者 北島縝衛

装幀 原弘

印刷・大日本印刷株式会社

本文用紙・本州製紙株式会社

函貼・神崎製紙(ミラーコート)

同納入・東邦紙業株式会社

クロース・日本クロース工業株式会社

同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京(291) 3721~7
振替口座 東京10802

製本・新宿 加藤製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

人間の條件

まえがき	五
第一部	ヒ
第二部	一七九
第三部	三三七
第四部	五〇七
第五部	六九九
第六部	八五一

年 解

譜 説

.....

竹

内

好……二三

1010

挿画 生沢 朗
写真 三木 淳

五味川純平集

人間の條件



ま え が き

或る局面での人間の條件を見究めたいという途方もない企みを私はした。大それたことだとは、手をつける前からわかっていたが、あの戦争の期間を、間接的にもせよ結局は協力という形で過ごして来た大多数の人々が、今日の歴史を作ったのだから、私は私なりの角度から、もう一度その中へ潜り直して出て来なければ、前へ進めないような気がした。書き終ってみて、果して出て来られたかどうかは怪しいものだが、この一年間、作中の人物と共にあの数年間を暗中模索したことだけは事実である。そしてまた、人間が生きて行く條件を、あとになって整理したり修正したりしても、失われた日々は遂に甦らないということも、悲しい事実である。

『人間の條件』という題名は、アンドレ・マルロオの作品に同名のものがあるので、随分気になったが、他に付けようがなかった。

これは勿論フィクションである。梶をはじめ、人物は

実在しない。いつの時代でもそうだが、歴史の事実はいくしよんよりも遥かに複雑で、ドラマチックである。それはそのわけなのだ、無数の人間が長い時間をかけて織り成す壮大な社会劇なのだから。そういう歴史を前にしては、虚構という手法に拠らなければ、とても真実の門口に近づくことが出来るものではない。

物語の時を戦争のさ中に置いたけれども、歴史がもしなんらかの程度に繰返されるものならば、われわれ戦中派が味わった苦汁は、戦後派の人々とも無縁ではないかもしれない。何故と云って、われわれが前の世代の遺産としてあの戦争を苦痛と絶望の中で背負った事実があるにもかかわらず、いままた怖ろしい遺産相続の遺産がなされようとしているかに見受けられるからである。多少でもそういう共感が得られるとすれば、作者の願望は殆ど刺すところなく果される。

ところで、何を書くにしても、それが物語であるなら

ば、面白くなければならぬ、という觀念から私は離れられない——面白く書けたかどうかは別として——。私
がここで云う面白さは、練達の文学者達からは「通俗」
だと誹謗されそうな面白さである。もし大衆の健康な欲
望が求め、親しみ易いと感ずる面白さがそういうところ
にあるのだとしたら、私はそれを探したい。それが追隨
主義になるかならないかは、面白さのせいではなくて、
主題の質の問題である。私はせいぜい面白く書こうとし
た。それにもかかわらず、随所に晦渋で生硬なところが
あるらしい。力量不足で、大それた仕事が所詮手に負え
なかったのである。

一九五六年七月一日

五味川純平

第一部

いつまで歩いてもきりが無い。そうしたものだ、二人連れで歩く道は。とりとめなく語り合ったが、肝腎なことには触れていない。触れたいくせに、互に避けている。棉のような雪が宵闇の迫る中を静かに舞い降りていた。寒くはなかった。満洲では、こういう雪は珍しい。たいていが砂のようにサラサラとして、吹きつけられて肌をさす。それが、いまは、ふんわりと柔かく包むようである。

町角で二人は立ち停った。人通りは少かった。雪でふちどられはじめた窓々に灯が暖かく瞬いていた。ここから先き、道が二つに分れている。

「あたし、もう、行きましようか？」

美千子が心とは反対のことを云った。

梶は美千子の肩越しに、角の家具店の飾窓を見ていた。美千子は梶の視線の先きに、壁掛の皿を見た。ロダンの《ベーゼ》の模写を焼付けたのであろう、裸形の男女が轡と抱き合っていた。

梶の視線がそこから外れて、宙に迷った。美千子がそれを捉えた。

「あなたらしくないわ」

「何故！」

「逃げているんですもの」

男の眸が灯を受けて強く光った。それが据って、注がれると、女は胸が迫って切なくなった。

「あたし、納得出来ないの。いくら戦争だからって、愛しているのに結婚しない方がいいなんて」

「……しない方がいいと思うんだ」

「どうして？」

「僕にだってほんとうのことはわからないよ」

梶はまた壁掛の皿を見た。美千子は梶の外套の幅広い肩に積った雪を撫でて、その襟をそと握った。

「欲しくないの？……あたしを」

「欲しいよ！」

これは激しかった。青年の欲望がほとばしるようであった。

「あたしも欲しいわ。……なのに、どうして結婚出来ないんでしょ」

「何度云ったかわかってくれるんだ」

「知らない！……聞きたくないわ」

と、かぶりを振った。頭巾に積った雪が舞い落ちた。

「いつ赤紙が来るかわからない、明日来るかもしれない、そうおっしゃるんでしょ？ 聞きたくないの、そんなこ

と。あたしは平凡な女です。好きな人と結婚する。それ以外の幸福なんて考えられないの。結婚して、その翌日に赤紙が来たって、あたし後悔なんかしやしない。そりゃ、泣くわ。きつと、死にそうなほど泣くわ。でも、それ以上の幸福なんてどうしても考えられない」

男は喜んだ。誇らしかった。そして当惑した。赤紙か白紙か、必ず来るだろう。それも近いうちに。行けば、還れないものと、悲壮な感慨が先きに立つ。数理の確率では割り切れない、どうしようもない気持である。いっそのこと、欲望にまかせて幸福とおぼしいものにむしゃぶりつくか。束の間の、明日も知れぬものであっても、女は覚悟しているというのだ。

「じゃ、これから……」

と、ためらいながら云った。

「僕の寮へ行く、僕の部屋に泊めるよ、今夜は。かまわないか？」

女の眼が一度は伏せて、それからキラと光った。

「いいわ。……行くわ！」

美千子はその方角へ踏み出した。梶は動かなかった。

「君は君の寮へ帰り給え。……来てはいけない」

美千子が立ち停って、向き直った。宵闇を隔てて、その顔が暗く歪んで見えた。

「試したのね！ 試してはいけないことを」

声が慄えていた。それが強く変った。

「怖い？ 模範社員の経歴に疵がつく？……あなた臆病よ。卑怯よ。……梶さんのバカ！」

美千子は別の道を走り去った。梶は黒い空を仰いだ。雪が降りしきっていた。

臆病でも卑怯でも、よかったのだ。模範社員の経歴に疵がつく？ などと云われさえしなければ。梶は愛情の痛みと憤怒を覚えた。美千子の衣服を剥ぎ取って、欲情を存分に注ぎたかった。その美しい豊かな肉体に埋没して幸福の幻想に浸りたかった。せめて、戦争を忘れたかった。あすか、あさってか、いつの日か、そこへ引き出される自分自身を。

梶はもう一度飾窓の中の掛皿を見た。裸形の男女は恍惚として抱き合っていた。戦争だからといって、何故そうしてはならないんだらう？ 彼が美千子をそうする機会が去ってしまったのかもしれない。彼は灼けつくような渴望に喘いだ。若い男の幻想の中では、幸福は、たいてい若い女の白い裸体の形をとっている。それなのに、彼はそれを抱き寄せ、抱き締めようとしなかった。しかも、女がそれを望んだというのに。

をしている者は少かった。巨大な会社では、たいてい何処でもそうである。定時に出勤して退社する。その間の時間を要領よく空費すれば、生活が一応保証されるのだ。植民地の会社では殊にその傾向が著しい。

暖房がよくきいて、室内は暑かった。みんな上衣を脱いで、袖覆輪をつけて、机についているが、無駄話をしたり、会社用箋で手紙を書いたり、電話で長話をしたりしている。煙草の煙があちこちから盛んに立ち昇る。妙に喉を刺戟するような匂いがあるのは、煙草の配給量が切れて、地場の安煙草をあさるせいである。

梶のテーブルに属する中年の准職員が隣りの同僚に云った。

「スターリンググラードでドイツ軍が参るとは思わなかったよ。こうなると、もうドイツもあまり当てにはならないね」

「これからソ連がどう出て来るかだよ、問題は」

笑いながらだが、日ごろの懸念が正直に出ていた。満洲には太平洋はない。だから対米戦争の実感稀薄である。満洲には變々として長いソ満国境がある。だから、ソ連がどう出るか？ この方がよほどに切実なのだ。

「心配ない」

と云ったのは、向い側の机の若い准職員である。

「満洲には《関特演》以来関東軍がデンと構えている

よ。ピリッともすることじゃないさ」

大きな声でそう云って、梶の方をチラと偷み見た。梶は、黙って、調査報告を書いていた。《出銃に及ぼす生産諸力の影響》と標題がついている。

「関東軍には大西兵長がデンと構えているからね」

と相手が云うと、若い准職員の予備役兵長は得意そうに「そうや、そうや」と笑った。山西作戦で蛮勇を振るったことが、この若い男の生涯の自慢となるに違いない。

「しかし、どうしてやらなかったんだろうか？」

と、梶の直ぐそばにいる年嵩の職員が話の方へ顔を向けた。

「ドイツが破竹の勢で進撃したときに、日本がシベリアへ出兵して挟み討ちすれば簡単だったじゃないか。それこそ関特演以来関東軍にはそれだけの實力があるんだから」

話はそこでちょっと途切れた。南北両面作戦をやるだけの實力が日本にはない、ということだけがおぼろげながらみなにわかっている。しかし、そうやれば早く勝てそうなものだし、赤の脅威を簡単に取り除けそうなものではないか、という気はするのだ。昭和十六年夏の関東軍特別大演習、略して関特演と称する大動員が何の目的で行われたか、一介のサラリーマン風情にわかつろ答は

なかった。日本はドイツがロシアに勝つと信じたのだ。むしろ、あまりに早く勝つことを怖れたと云ってもよい。ドイツ軍がロシア全土を疾風の如くに席捲して、その驚異的な勢力とソ満国境で対峙するような結果となるかもしれぬことを。

梶は黙って書いていた。シベリア出兵をしてくれなかったことは倖せであった。もし出兵が行われていたら、梶などという青年は生きてはいなかっただろう。

「南太平洋ではどうなんだろうね？」

と、別の事務員が小声で云った。

「ほんとうのところ、ガダルカナルから転進したというのは……」

惨敗したということだ。梶は書きながら肚の中でそう云った。全滅を辛うじて免がれたということだ。ただそれだけのことだ。

「戦略的撤退だよ」

大西がまた大きな声で断定的に云った。

「アメリカの奴、やつと取つたと思つたら空ツぽの島だったというわけだ。その間に日本軍はもっと有利な地点から攻撃するんだ。見とてみい」

と、梶の方を、今度はこれでもかというふうに見た。

梶は眼を上げた。好戦的な男と反戦的な男、従つてウマの合う筈のない二人の視線が絡み合ったが、梶は直ぐに

そらした。入口の方から、梶へ向つて笑いながら机の間を縫つて来る男が見えたのである。

「恪勤精勵だな、相変らず」

その男、影山は、近づくなりそうからかった。太い眉の、いかにもごつい感じの男が、なんとなく親しみ易く思わせるのは、歯並が白く清潔なせいだろう。

「出銃に及ぼす生産諸力の影響、か」

と、影山は報告書の表紙を指ではじいて、ニツと笑つた。

「どうだ、梶。恋愛に及ぼす戦争諸力の影響、という奴を書いてみんか？」

美千子のことだな？ 梶の気持は、甘酸^{あまじ}っぱくなつた。三日口をきいていない。美千子はこの上の部屋、タイブ室にいる。都厚いコンクリートの天井が梶から美千子をさえぎっている。梶は天井を見たかった。反対に顎を引いて、云った。

「何の用だ？」

「別れに来たんだ。ちよつとばかりセンチだがね」

そうか、とうとう来たか。梶は殆ど口の中で云った。

「……発^はつのはいつだ？」

明日の朝だ、と、影山は濃い頭髮を撫でた。これはあと数時間で彼の頭から切り落される。今後数年間、或は永久に、いまの形には戻らないかもしれない。

「俺はチンピラの時代に兵隊ごっこはいつも大将だったからね、オトナの兵隊ごっこでもどうにかなるだろう」

「明日とはな……」

梶は自分のことのように気が滅入った。

「ゆっくり話をする間もない」

「五日前に来たんだがね、毎晩一人で呑み歩いていた。最後に君を思い出したというわけだ。ところで、どうするんだ？」

と、影山が拇指を立てて、天井をさした。その上を、いま、美千子が歩いているかもしれない。梶は再び甘酸っぱい気持を味わった。今度のは重苦しいだけいけなかった。

「君は明日行く。あさって僕が行かないと、誰が保証する？」

「行っても死ぬとは限るまい。俺は生来オブティミストだからこう云うんだがね。入社以来の四年間というものの、俺は君と違って、徹底的にサボって呑み歩いた。遊ぶことで思い残しはない。その俺が後悔していることがあるとすればだ、ただ一つ、好きな女をこしらえて、結婚しておかなかったことだ。その女房の腹に俺の生命の一滴を射ち込んで、命中させておかなかったことだ」

あたりの事務員達が話の露骨さを面白がって笑った。梶は美千子を妄想した。悩ましく思つまる思いがした。

「これは、梶、むずかしく云うと、庶民的エネルギーの具現という奴か。未来を無條件に信ずるといふ、な？」

「俺も、そのときにはそう思うかもしれない。しかし、オブティミストにはなりきれないからね」

すると、影山が、ふいに小聲になった。

「どうだろう、いつまで続かな？」

梶は相手の珍しく真剣な顔つきをじっと見た。戦争の先きが短いしたところで、この男の生還の保証にはならないのだ。だが、少くとも、気休めにはなる。

「……長くはないね」

「……三年か……？」

「さあ……」

梶は煙草の端を机で叩いて、自分のテーブルを見渡した。みな聞かないようなふりをして聞いていた。戦時下に人前で、しかも軍需会社のようなところで、悲観的な観測を述べることは危険であった。だが云いたかった。予備役兵長大西准職員が横眼で梶を見ていた。彼は山西作戦の猛者だ。支那の女を強姦することがいかに娛しんであったか。人間の後頭部に銃口を押しつけて発射すると、いかに人間は簡単に「コロリン」と死ぬものであるか。それが、彼の戦争知識の体系なのだ。かまうものか。云ってやれ。どうせ今度は俺が征く番だ。梶は云う気になった。